

# 高等学校作文教育におけるインベンション指導

—寺田寅彦のレトリックを利用して書く—

田 中 宏 幸

## 一、問題の所在

インベンションは、古代ギリシャで発達した古典修辞学の五大部分—(1) invention(発想)、(2) disposition(配置、配列)、(3) elocution(修辞)、(4) memory(記憶)、(5) action(所作)の最初に位置づけられるものである。「何を述べるか」という「何」にあたるものを見いだす段階、述べるべき思想を創出する段階、と一般に定義づけられる。

今回、インベンション指導を取り上げて考察しようとするのは、高等学校作文教育において、思想の創出がほとんど指導の対象となっていないからである。一体に高等学校においては、作文指導はきわめて低調である。教育課程に「国語表現」が組み込まれていても、せいぜい小論文対策か就職作文の練習、さらに現代文や古典の問題演習に切り替えられてしまうことが多い。また、かろうじて作文の時間が確保されたとしても、形式的な表現技術の指導ばかりが先行しがちである。

私も例外ではなかった。これまでの私の実践を反省する時、強くそのことを思う。例えば、三校目の勤務先であるM高校の生徒たちに対しては、「文章構成法」を身につけさせることに力を注いだ。M高校の生徒たちは、学習意欲や課題意識が乏しく、論理的にものを考えることが苦手で、確固たる自己の意見を持ってないでいた。彼らに対して私は、まず型を教授しようと考えたのである。一年間の指導の結果、確かに一定の成果は得られた。だがその反面、生徒の文章の大半は類型的になり、表現内容の貧しい作文が突出する結果となったのである。それは、生徒の側から言えば、書くべき内容を見出せないまま型を押しつけられ、かろうじて書き上げた文章であったと言える。

作文指導の問題はここにある。型を教授することはもちろん必要なことではあるが、人に語るに値する「想」を獲得させ、確たる意見を持たせる指導が伴わなければ、実質を伴った作文指導とはならないのである。とりわけ「書くことがない」と苦しむ高校生を相手に、意義ある作文指導を展開するためには、書くべき内

容をいかに創りださせるかという問題にまず取り組む必要があるのではなからうか。

本稿は、以上のような問題意識のもとに、豊かな発想を育てる授業を試みた実践を報告するものである。それは、寺田寅彦の随筆の学習を契機として、そのパロディを創出させ、その結果として発想力や問題発見力、また論理的思考力を生徒の身につけさせようとする試みである。教材のインベンションとレトリックを応用する活動を通じて生徒の「想」を切り開く、インベンション指導の一つの試みと位置づけられよう。インベンションは学習者の内部に関わる問題であるだけに、形にあらわれた作文だけでは判断しにくい部分も多いが、今回は、できるだけ丁寧な生徒の作文を報告することによって、「想」を発見させる指導方法を解明してみたい。

## 二、教材について―寺田寅彦「柿の種」

今回、用いた教材は、寺田寅彦の随筆集『柿の種』(岩波書店版『寺田寅彦全集第十一巻』一九六一年刊)所収の短章二編である。明治書院版「現代文」の教科書(一九八四年発行)に採録されている。

短章Ⅰは、次のような文章である。(傍線引用者)

無地のうぐいす茶色のネクタイを捜して歩いたがなかなか見付からない。

東京という所も存外不便な所である。

このごろ石油ランプを捜し歩いている。

神田や銀座はもちろん、板橋かいわいも捜したが、座敷用のランプは見付からない。

東京という所は存外不便な所である。

東京市民がみんな石油ランプを要求するような時期が、いつかはまた巡って来そうに思われて仕方がない。

一方、短章Ⅱは、「一日忙しく東京中を駆け回って夜更けて帰って来る」ときのふとした疑念、すなわち「わが家の存在の必然性に関する疑い」を述べたものである。

短章Ⅰは、大正十二年七月(関東大震災の二か月前)俳句雑誌『波柿』の巻頭に掲載された、短章Ⅱは、昭和四年七月同誌に掲載されたものである。この二章は、直接的な関連性を持たない随筆であるかのように並置されている。この教材が、物質文明の危うさや人間存在の不確実さに対して警告を発したものとして読み取りやすくなるようにとの配慮であろう。

ところが、いずれも平明な言葉で表現されているので、かえって軽く読みすぎられてしまいかねない一面を持っている。このような教材を学習させるにあたっては、筆者のさりげない表現技巧に気づかせ、読み深めをさせる工夫が必要である。

とりわけ短章Ⅰでは、「事例↓キー・センテンス↓事例↓キー・センテンス↓予言」という構成もさることながら、係助詞の使い

方の妙味に気づかせることがポイントとなる。最初のキー・センテンスでは、「も」を使うことによって、「地方も不便だが、東京までも不便なのか」という当惑の思いを表現するとともに、「東京は便利な所だ」という常識に対する異議を唱えている。第二のキー・センテンスでは、「は」を用いることで一層「東京の不便さ」を強調し、物質文明に安住する人々に対する警告としての意味を持たせているのである。

わずか一七〇字ほどの短章でありながら、この文章が生き生きとしており、説得力があり、しかも含蓄あふれるものとなっているのは、実感あふれる具体例の適切さと、このようなレトリックの見事さによっているのである。

この短章のような、自然科学者の持つ冷静な観察力・分析力と、俳人の持つ鋭い直感力・詩情とが見事に融合した文章を読ませることによって、私たちの日常生活を振り返らせ、日ごろ何気なく見過ごしているものに新たな認識を持たせたいものである。彼の奇抜なインベンションと巧みなレトリックは、我々の既成の常識を問い直してくれる。寅彦のレトリックを利用した文章を実際書いてみることによって、発想の転換を図り、豊かな「想」を獲得できるように導きたいものである。

### 三、授業の実際

#### 1. 指導の概要

(1) 日時 一九八九年十月二日(月)／十月三日(火)

(2) 対象 兵庫県立加古川南高校普通科五回生

三年五組四十七名(女子47名)

(3) 教材 寺田寅彦「柿の種」より短章二編

(所出『明治書院「現代文」一九八四年発行)

\*教材を与えるにあたっては、短章Ⅰの二つのキー・センテンスの係助詞「も」をあらかじめ空欄にしておいた。

(4) 学習目標

①内容を的確に把握し、要旨をまとめることができる。

②筆者のものとのらえ方の特徴を読み取ることができる。

③助詞「は」と「も」の使い分けに気づき、文脈上の効果を理解することができる。

④筆者のインベンションとレトリックを利用した文章を書くことによって、日常生活を新たな視点でとらえることができる。

(5) 指導過程(2時間扱い)

【第一時】

①筆者について予備知識を持たせる。

②本時の学習目標の確認。

③短章Ⅰを黙読させ、その後、範読する。

④時代背景等を補足説明する。

⑤空欄に入る助詞を予想させ、「は」と「も」を使い分ける微妙な表現の差に気づかせる。

⑥短章Ⅰの要旨をまとめさせる。

⑦短章Ⅱを指名音読させる。その後黙読させる。

⑧ 短章Ⅱの「妙なこと」の内容を理解させる。

⑨ 短章Ⅰ・Ⅱを関連づけ、二つの文章に共通する内容（寺田寅彦が問いかけているもの）を自分の言葉でまとめさせる。  
⑩ 手引き「『柿の種もどき』を書こう」を配布し、次時の予告をする。

【第二時】

① 本時の学習内容の確認。

② 前時の生徒の表現活動を整理したプリント「寺田寅彦が問いかけているもの」を配布し、前時の学習内容を復習する。

③ 短章Ⅰのレトリックを利用したパロディ「柿の種もどき」を書かせる。（二百〜三百字）

④ 「○○さんを推す」と題する批評カードを用いて、互いの作品の感想を書きあう。

⑤ 「寺田寅彦随筆集」（岩波文庫）を紹介し、読書をすすめる。

(6) 板書（第一時）

寺田寅彦 「柿の種」

【短章Ⅰ】

ネクタイ＝趣味品……入手不可↓不便＝実感  
東京も存外不便

地方……不便  
東京も……不便

前提「東京＝便利」という常識

導入

展開

石油ランプ＝実用品：入手不可↓不便＝実感  
東京は存外不便

強調

結び 予測  
(予言)

(常識に対する懐疑)  
(物質文明に対する警告)

【短章Ⅱ】

ふと妙なことを考える（日常生活を越えた視点）

＝ 「我が家の存在の必然性に関する疑い」

↑偶然

(日常性に対する懐疑)

(人間存在に対する根源的疑問)

\*板書事項の（ ）部は、生徒の発言にとまなない、口頭では触れたが、実際には板書しなかった。

2. 授業の工夫と実際

(1) 「導入」での工夫―《空欄補充》

教材化の際空欄にしておいた部分に、適語を補わせることにより、寺田寅彦のレトリックに気づかせようとするものである。

実際にやらせてみると、大半の生徒は、第一キー・センテンスの空欄に「は」を入れてしまい、第二キー・センテンスの空欄に

入れる助詞が見つからなくなってしまう。「は」と「も」を逆に入れた生徒が十名。原文通り正しく入れた生徒は一名しかいなかった。このように正解率はきわめて低かったが、実際に書き込ませてみることは、文章を深く読ませることにつながり、その後の学習において活発に意見を導き出すことにつながった。

### (2) 「展開」での工夫―《要約文を書く》

内容読解の段階では、二つの短章を関連づけた要約文(百字)を書かせることにした。短章Ⅰ・Ⅱそれぞれの要約は簡単だが、二つを関連づけ、共通点を発見しまとめるには、深い読みが必要となる。筆者の言葉の抜き出しでは要約にならない。何とか自分の言葉で表現しなければならぬ。

実際には、とまどう生徒が多いので、数名の生徒に意見を言わせてから、十分間で書かせた。

白紙の生徒はいなかったが、二つの短章を結びつけられない者が十名いた。何とか結びつけて書いたものを分類すると、四種類に分けられる。

A 「物質文明批判」ととらえたもの ……12名

B 「日常性への懐疑」ととらえたもの ……20名

C 「都市化批判」ととらえたもの ……1名

D 「人間存在の小ささの指摘」ととらえたもの ……1名

Dの解釈は短章Ⅱの末尾の一文に捕らわれすぎた読みであり、そのまま認めるわけにはいかないが、授業での検討素材とした。ここで、A～Cのどれを正解とするかにはあまりこだわらない

方がよいだろう。私自身はBの読みが最も妥当であると考え、それを生徒に押しつけることはしないでおこうと考えた。ここは多様な読みが許容されていいところである。

### (3) 「発展」での工夫―《創作活動》

短章Ⅰの構成とレトリックを利用したパロディ作りである。パロディ「柿の種もどき」と名づけた。つまり、二つのキー・センテンス「○○という所も(は)存外な△△な所である。」の、○○および△△の部分に別の適当な語をあてはめ、日常生活のある断面を批判的に捉えさせようとするものである。「所」に限定しなくともよい。「もの」でもよい。要するに、自分の身近な事物の意外な一面を発見させ、意識的にもものを見る目を養うことにつながることを目的とした活動である。「存外」である「を」必ず使うように指示しているので、新たな「想」が切り開かれると期待されるのである。

次のような手引きを用意した。

「柿の種もどき」を書こう

「柿の種」の短章を利用して、「柿の種もどき」を書いてみよう。

日ごろ何気なく過ごしている私たちの身の回りにも、よく観察してみれば、意外な一面が見出されるのではないだろうか。

私の住んでいる町、私の通っている南高、私たちの使っている物……

「○○という所も(は)存外△△な所である。」の一文をキー・センテンスにして、随筆を書いてみよう。  
《構成パターン》

(エピソード①)

- ・体験したこと。
- ・実感したこと。

○○という所も存外△△な所である。

- ・○○は地名でなくともよい。

(エピソード②)

- ・体験したこと。
- ・実感したこと。

- ・△△は、便利、不便に限らない。

○○という所は存外△△な所である。

(予測・予言・警告)

〜に思われて仕方がない。

- ・体験を基に、まだ気づいていない人に警告する。

《発想メモ》三つ四つ候補をあげてみて、一番魅力的なものを選ぶ。

4	3	2	1	
		○	○	
		存外△△	エピソード①	エピソード②

#### 四、生徒の作品について

##### 1. 代表的作品例

できあがった作品は次のようなものである。

まず、寺田寅彦のレトリックとインベンションを応用し、社会問題に目を向けることのできた作品を取り上げる。

作品例①は、地球温暖化現象をやや誇張して取り上げた作品である。目新しい指摘ではないが、日常の晴雨の予報から異常気象へと事の意外さのレベルを上げ、結びで地球温暖化に対する警告へとつなげている。

作品例②は、機械文明と自然破壊を問題に取り上げた。やや具象性に欠けるエピソードではあるが、目に見える自然破壊から、内面的な心の破壊へと抽象度のレベルをあげ、結びで、人間性喪失の危機を訴えている。

いずれもキー・ワードにも工夫を凝らし、視野の広がりを獲得したと言える。

##### 作品例①

Y・M

きのう天気予報で、今日は晴れると言っていた。しかし、今日は、雨だった。

天気予報というものも存外あてにならないものである。

最近では、異常気象で、人々が予測していなかった天気になることが多い。

天気予報というものは存外あてにならないものである。

人々が、冬になっても、冷房器具を買い求めている光景を、町のあちこちで見られる日が、近々やって来るように思われて仕方がない。

作品例②

K・M

最近、文明が発達し、便利になった裏では、自然が破壊されている。

文明というものも存外危険なものである。

人間の考え方で画一化され人間の心もすさんできている。

文明というものは存外危険なものである。

機械だらけの町で、ロボットのような人間が生活するという光景が見られるのも、時間の問題だというふうに思われて仕方がない。

次の二つの作品例は、同じように交通渋滞を取り上げながら、一方は車社会の批判、他方は都市生活の批判と、それぞれに自分の「想」を發展させた例である。

このように全体としては、寺田寅彦に倣い、そのまま「不便」というキー・ワードでまとめたものが多かった。

作品例③

Y・K

買い物に出かけて、ちょっと駐車して寄りたいと思っても、とめるためにお金がかかる。

車というものも存外不便なものである。

高速道路や大道路では、渋滞している時、身動きがとれなく

て、ただただ時間を費やすばかりだ。

車というものは存外不便なものである。

このままでは、ますます車が増加し、いつか道路上は、車で埋め尽くされて、人間にも公害の悪影響が及ぶように思われて仕方がない。

作品例④

M・H

散歩をしようとしたら落ち着いて歩けるところがなかった。

都会という所も存外不便な所である。

ドライブしようと思ったら、なかなか思うように前に進めなかった。

都会という所は存外不便な所である。

世の中の流れに流されていると、落ちつく場所のない人々はいつか都会を捨ててしまうような気がしてしかたがない。

さらに、キー・ワードを大きく転じると、意外な作品が出てくる。次の作品例は、社会的な広がりには欠けるが、高校生の日常生活の一面をさりとすくい上げた点では、魅力的な展開にたっている。

作品例⑤

M・T

朝、目が覚めると、たいてい十時を過ぎている。朝とも昼ともいえない、どっちつかずの食事をとって、くつろぎにもならぬ不規則な時間をついつい過ごしてしまう。

休日というものも存外不要なものである。

一息ついたところで、勉強しなければいけないと思ってもなかなかできない。平日だったら、嫌でも授業を受けなければならぬから、できるのに。

休日というものは存外不要なものである。

休日をもっと有意義に過ごすべきだったという、後悔の気持ちが必要とずれるだろう。

作品例⑥

N・F

私がテレビを見ていると、母が突然受話器を取り、何やら話しかけ始めた。どうやらテレビの音と間違えたらしい。

母という人も存外変わった人である。

のどがかわいたので、母に甘い物が飲みたいと言った。すると、頭痛薬を出してくれた。どうやら母には、頭が痛いと言えたらしい。

母という人は存外変わった人である。

数十年後、母のしたことを、自分もやっているのだろうか。今から不安に思われて仕方がない。

このほかの生徒たちも、それぞれ懸命に「想」を練り、次のような題材を取り上げた。女子クラスであるせいか、身近な素材を取り上げる傾向が強かったようである。

題材一覧

A 交通（ローカル線・車・自転車など）

B 地域（加古川・デパートなど）

- C 身近の小物や家具（冷蔵庫・消しゴムなど）
- D コミュニケーション（電話・言葉など）
- E 現代社会問題（ビデオ・薬・消費税・占いなど）
- F 自然と文明（機械文明・地球など）
- G 高校生活（古典の授業・部活動・クラス）
- H 生き方（女性など）
- I 家族（母・ペットなど）

2. 生徒のつまずき

題材こそこのように多岐にわたったが、右のように趣旨を理解し、全体として論旨の一貫した文章にまで仕上げることでできたものは、三分の一余りであった。

うまくいかなかった生徒たちは、どこでつまずいたのであろうか。そのつまずきには四つの類型があるようである。

- ▶ 類型1 常識をくつがえすものが見方ができていないもの。
- ▶ 類型2 エピソードとキー・センテンスとがつながらないもの。
- ▶ 類型3 エピソードと結びとが論理的につながらないもの。
- ▶ 類型4 キー・センテンスそのものが使えなかったもの。
- ▶ 類型1 常識をくつがえすものが見方ができていないもの。

作文例⑦

K・N

近所の市場は、新鮮な食物を、大量に買うことができる。

二四時間コンビニエンス・ストアも存外便利なものである。



一つ一つパッケージ化されて、清潔であり、一日中、静かなることはない。

二四時間コンビニエンス・ストアは存外便利なおものである。いつか、日本だけでなく、世界中の市場的なものが、全て、二四時間コンビニエンス・ストアになってしまいかもしれないと思うのは誰もいないだろうか。

コンビニエンス・ストアを取り上げるのなら、むしろその意外な「不便さ」を指摘する必要があることに、この生徒は気がついていない。主語のねじれ、結びの文における反語表現の誤用など多くの問題点を抱えた作文でもある。「存外」という言葉に着目させる必要がある。

▼類型2 エピソードとキー・センテンスとがつながらないもの。

作文例⑧

K・H

加古川から神野へ電車で帰る時、なかなか電車がこない。しかし、神野へ帰るには、この電車しかない。

加古川線も存外便利なおものである。

姫路や明石はもちろん、三宮から電車で、神野に行くには、唯一この電車だけである。

加古川線は存外便利なおものである。

加古川線が廃止されるような時がいつかすれば、きっと人々は今以上に、三宮に行くにも、神野方面に行くにも、不便になるように思われて仕方がない。

この生徒は、最初は「加古川線（ローカル線）は不便だ」という趣旨の文章を書こうとしていた。「加古川線は不便だ」というのは常識的なものの方ではないのか」と助言を与えられ、発想を転換した結果産まれた作品である。初発の「想」が依然として残ったせいか、エピソードの表現を適切なものに改められなかったのである。そのため、エピソードとキー・センテンスとが論理的につながらなくなってしまった。

このつまずきは、心にもないことを書かせようとしたために生じたのだろうか。私はそうは考えない。発想を転換することによって、新しい角度からものを見る目を養うことの方を大事にしたい。常識的で皮相なものの方からいったん離れてみて、視野の広がりや柔軟な発想力を身につけてやりたい。こうしたつまずきは、推敲の時間を与えてやれば、自分で克服できるものであると考える。

▼類型3 エピソードと結びとが論理的にはつながらないもの。

作文例⑨

A・N

道に迷った時、おなががすいた時、あらゆる困った場合がある。

女性というものも存外便利である。

道に迷った時は愛想よくして男の人に聞けばいい。たいていの人はすごく親切に教えてくれる。おなががすいた時だって、たいていは男の人が払う。他、いろいろな場面で女の人は得をする。男の人が失敗して許されない場合でも、女の人はなら許される場合がある。

女性というものは存外便利である。

でもそれは、若い時だけなのだから、女の青春は短いと思わ  
れても仕方がない。

この作品例は、エピソード①に具体性がないために、キー・セ  
ンテンス「女性というものも存外便利である」とつながらない。  
エピソード②として書かれた「道に迷った時は〜りたいは男の  
人が払う。」という事例を、エピソード①にまわしたいところであ  
る。

最大の欠点は、男性におもねる女性の卑屈な生き方を皮肉ろう  
としているのか、逆に肯定しようとしているのが曖昧になった  
点である。結びの文の、自発と受身とを混同した「思われる」の  
使い方もまずい。着想はよいのに、結びが適切でなかったために、  
論理の一貫性のない文章になってしまったのである。

類型2および類型3の両方のつまずきを合わせ持っている作品  
である。

▼類型4 キー・センテンスそのものが使えなかったもの。

作文例⑩

J・N

家から窓の外をながめているときみしかった。  
公園という所は存外孤独な所である。

昼の間は子供達がわいわい、がやがや言っているけど、夜、  
特に冬、とっても静かで昼間のことがうそのよう。

公園という所も存外孤独な所である。

公園という所がいつかは、いや近い将来きつとなくなっていし

まうだろう。

この生徒は、寺田寅彦の「は」と「も」の使い分けも理解でき  
なかったのであろう。エピソード、キー・センテンス、結びがい  
ずれも論理的につながっていない。

彼女以外にも、キー・センテンスを二回使用するという今回の  
条件すら守れない生徒が数名いた。

こういう状況にある生徒の「想」を切り開く指導を今後探究し  
なければならぬ。

### 五、学力の分析とインベンションの指導法

総じて、こうしたつまずきは、次の四つの力の不足に起因して  
いると考えられる。

#### ① 問題発見力

日常のさりげない出来事に一つの真実を発見したり、常識とさ  
れていることの中に新しい意味を発見したりすることは、日頃か  
ら問題意識を持って生きていないと出来ることではない。国語教  
室の課題としては、その問題意識をいかに持たせるかということ  
である。取材指導にもっと時間をかけ、生活を見る目を養う必要  
がある。「想」の発見・熟成には時間が必要である。

#### ② 柔軟な発想力

こうした文章を書くこととすれば、発想の柔軟性が必要である。常識に寄りかかった発想では、新しいものは何も見えてこない。「○○」という所は存外△△な所だ」というキー・センテンスの「○○」と「△△」とをどう結びつけるか。そこに「柿の種もどき」が成功するかどうかの鍵が隠されているといってもよい。ブレンストーミング等もおそらく有効であろう。

### ③ 豊かな語彙力

生徒の語彙の不足も、今回の実践を通して痛感させられた点である。高校三年生にもなっているので〈理解語彙〉はかなり多く所有しているが、それらが〈表現語彙〉にまで高まっていないのである。いくつかの事例を取り上げ、共同でキーワード探しをしてみるなど、語彙指導も必要である。

今回でも「便利」「不便」という言葉では表現しきれないエピソードがたくさん取り上げられていた。それぞれにふさわしい語彙を探させることにも時間を惜しまないでいたい。

### ④ 論理的な思考力

論理的な思考力は、今の高校生に特に欠けているものである。ものごとを筋道立てて考え、人に伝えていくことも、一朝一夕にできることではない。型を教えるとともに、それを使いこなす練習を実際に反復経験させなければならぬ。

だが、本稿の冒頭に述べたように、型だけが優先されてはなるまい。今回のように文章構成の型を与え、その型を模倣させるこ

とによって、生徒の潜在的な能力を引き出していく。つまり、型の応用によって新たな「想」を切り開いていくというねらいがその根底になくしてはなるまい。そして生徒たちは、こうした言語経験を積み重ねることによって、論理的な思考力を体得していくのであろう。

## 六、おわりに

以上の四つの力は、書くことによってこそ身につけることのできるものである。その際、やみくもに書かせるというのでは能がない。その一つの方法として、教材のインベンションとレトリックを利用し、主体的に書くことを促す指導を探究したい、ということを述べてきた。

「柿の種（短章Ⅰ）」に即して言えば、「存外」という語に注意を払わせることが大切である。この一語を生かすには、常識的なものの方から一旦離れて、日常的なものを見つめ直すことが必要になる。また、「柿の種」のように異質なエピソードを二つ以上取り合わせてみるのが、日常的なものを多面的に見つめ直すことにつながるのである。

寺田寅彦のような刺激的な発想に触れ、その教材のインベンションとレトリックを応用した文章を実際に書かせることで、生徒の発想力や問題発見力を育てていくことが可能になるのではなか、と考える。

もちろん、インベンションの指導はもっと多様にその方法が探

究されねばならない。また、歴史的にも、先達によってどのように取り組まれ、研究されてきたのかも、深く学んでおかなくてはならない。今回の実践を出発点として、高等学校作文教育におけるインベンション指導のあり方についてさらに研究していきたいと考えている。

【付記】

本稿は、一九八九年十一月の第三十回広島大学教育学部国語教育学会における発表原稿に手を加え、『両輪』第三号（一九九〇年六月、神戸大学教育学部浜本純逸研究室発行）に「表現から理解へ、理解から表現へ―主体的に書くことを促す授業の創造」という題で一旦発表したが、その後、「インベンション指導」という観点から改題し、再度加筆修正したものである。

（兵庫県立加古川南高等学校教諭）